

研究中間報告

研究チーム No. 128

研究幹事 渡邊順司

研究テーマ：

論文執筆や学会発表のためのリメディアル英語：「読む・書く・聞く・話す」

【はじめに】

理系学部の学生の多くは、1年次で英語や第2外国語を履修するものの、2年次や3年次では専門科目や実験科目が増えてくるため英語に触れる機会が激減する。このような長期にわたる空白期間を経て、4年次の卒業研究を履修するとき英語の文献を読み解く機会が訪れるが、発音や文法などの基礎的な内容を忘れかけているため正確に早く意味をつかむことができなくなっている。また、大学院修士課程においても英語を読み解くことはもちろん、英語で研究要旨や論文を執筆する機会が生じるが、英作文ができない状況になっている。さらに大学院博士後期課程では、国際会議において英語でディスカッションする必要に迫られるが、自分の研究内容を伝えることを含め、相手の質問を聞き取る能力も十分とは言えない。このような現状を鑑みると、何らかのリメディアル教育が必要であり、専門科目を修得する際に並行して英語を再修得する方法について検討した。学部4年時の卒研生の多くが、英文を音読させてもすらすらと読めない状況から、英文を英語らしく音読することが必要であると考えた。幼少期からの母国語の修得プロセスを考えると、「聞く→話す→読む→書く」となっている。自ら音読して、自分の耳に取り入れてなじませるのが重要であると判断できる。そこで理系学部の学生が研究を推進する上で不可欠な技術英語を効果的に修得するための方法論について研究し、論文執筆や学会発表のためのリメディアル英語：「読む・書く・聞く・話す」を提案した。特に本研究では、「読む・書く・聞く・話す」これら4つの能力を個別に学修するのではなく、並行して同時に学修することで効果的に力をつけることができると考えた。特に、単語がきちんと発音できるようになると、単語自体が意味をなして見えてくるため、頭の中にその意味するところが瞬時に意識され、文章を読み解くことができると発想した。本研究チームでは、理系学生に効率よく英語を再修得させる方法について研究するために、国際言語文化センターの教員とともにチームを編成し、論文執筆や学会発表のための「リメディアル英語」について研究する。

【これまでの研究成果】

研究幹事が担当している学部および大学院の専門科目の講義の初回授業時に、英文

和訳問題を解かせ、学生の英語の能力を把握した。半期15回の講義において、英文を発音し、意味を把握するトレーニングを専門科目の内容に沿いながら20分程度ずつ実施した。講義の最終回に初回授業時に解かせたのと同じの英文和訳問題を与え、英語の活用能力の変化を追跡した。

担当している専門科目は3年次配当のものであり、この科目を履修している3年次学生の特徴は、英語が得意だったと思われる学生であっても、英文を音読することも和訳することも意外と時間がかかっていることが明らかとなった。1年次に英語を履修して依頼、1年程度のブランク期間が大きく影響していると考えられた。本研究でリメディアル教育として実践しているのは、15回の講義中に順番に学生に例文を音読してもらい、訳を付ける時間を設けるといふ、ごく基本的かつ簡素なことのみである。1週間に一度の講義中に20分程度の時間を設けているだけであるため、実質的には効果の薄い内容かも知れないが、受講前後の答案を比較するとかなりの効果が認められることが明らかとなった。この理由について考察を進めているが、一つの可能性として、パラクライン効果であると考えている。パラクライン効果とは、医学用語の一つであり、疾患部から遠く離れた遠位部位で治療を促すタンパク質が分泌され、これが疾患部位に到達して治療が誘導されることである。講義中に他の学生が音読するのを聞くことで、上手だと感じる場合、下手だと感じる場合、様々であるが、普段は知ることのない他の学生の英語の実力、講義中に直に触れることで学生にとっては大きな刺激になって英語に対する学修の動機付けと意欲向上につながっていると考えられる。

これらの研究成果を含めて最終の叢書をまとめる予定である。